アフリカの民族舞踊に関する教材化研究
―デジタル教材「エチオピアの社会と舞踊」の開発を通して―

野田　章子[i]

近年，スポーツに関する人類学的な研究が文化理解教育にどのように貢献できるかが課題になっていることを受け，本研究は，アフリカの民族舞踊に関する教材開発を行うこと，また開発した教材の有用性を検証し，その意義を明らかにすることを目的とする。開発した教材のタイトルは,「エチオピアの社会と舞踊」である。本教材は，小学校高学年の国際理解教育での活用を目指し,「A. 調べてみよう！」,「B. 歌ってみよう！」,「C. 踊ってみよう！」で内容を構成した。また本教材をデジタル化し，児童のアクティブラーニングを可能にした。さらに，本教材をＳ市Ｋ小学校の実践授業で活用し，その成果を踏まえ，本教材の有用性を考察した。その結果，第１に，人類学的な調査を踏まえて開発したアフリカの民族舞踊のデジタル教材が小学生の異文化理解教育に有効であること，第２に，人類学的な調査を踏まえて開発したアフリカの民族舞踊のデジタル教材には，児童が疑似的社会体験できる場をつくりだせる可能性があることが見出せた。今後は，本研究を通して，運動やスポーツを文化として捉えている近年の学校教育に，異文化理解としての舞踊学習の可能性を示唆していきたい。

キーワード：人類学，教材化研究，アフリカ，エチオピア，民族舞踊，小学生，デジタル教材，異文化理解

はじめに

近年，スポーツに関する人類学的研究が文化理解教育にどのように貢献できるかが課題となり，民族スポーツの教材化をはじめ，その研究成果を学校教育にどう還元するべきかが問われている[1)]。

このような現状を受けて，筆者は，これまでアフリカの民族舞踊の教材化を念頭に置き，①エチオピア連邦民主共和国（以下『エチオピア』と略称する）で人類学的な調査を実施，②エチオピアの民族舞踊の教材を開発，③開発した民族舞踊の教材を使用した授業モデル作成，④小学校５年生を対象とした実践授業を試みてきた。そうした研究の結果，開発した教材が，小学校の国際理解教育に有効であることが分かった（野田 2020）。本稿では，人類学的な調査を用いてどのような教材を開発したのかを述べ，教材の有用性を検証し，その意義を明らかにすることを目的とする。

本研究で開発する教材は小学校高学年の学習用である。その理由には,「総合的な学習の時間」の内容に,「国際理解に関する学習」が含まれていることや,西岡が「小学校高学年は,『地理的意識の爆発核心期』であり，世界認識が飛躍的に拡大する，世界地誌の『学習適期』である」（西岡 2007：84）と述べていることがあげられる。

現在，小学校の国際理解教育では，SDGs（持続可

i　立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

能な開発目標）に資する取り組みが求められ[2)]，児童がアフリカをはじめさまざまな国の問題を自分の問題としてとらえ，自分ができることから取り組めるようになることが期待されている。しかしながら，いまだ小学校でアフリカが扱われることは少なく，実践事例や指導案も僅少である。

では，なぜアフリカの民族舞踊なのか。第１に，アフリカの民族舞踊は，人々が喜びや楽しさを表現する場で踊られることが多いため，小学生にアフリカの人びとの日常的な様子を伝えられる点，第２に，踊ったり，歌ったりする活動が主となるため，小学生の体験的な学習にふさわしい点，第３に，アフリカの民族舞踊は人々の行動様式や生活様式と深く結びついているため小学生の異文化理解に適していると考えられる点である。

そして，なぜエチオピアの舞踊なのか。本研究でとりあげたエチオピアはコーヒーの原産地である。そのためコーヒーを介して児童が遠く離れたエチオピアを身近に感じられると期待できる[3)]。また，エチオピアの民族舞踊には，ヨナ抜き音階で和風なメロディーになる歌，腰を落として内股で踊る動き，着物のような民族衣装など日本の舞踊との共通点が見受けられる。さらに，エチオピアの民族舞踊は，主となる動きが頭，肩，胸，腰，尻，脚など民族ごとに異なり，児童が理解しやすい。以上のように，親しみやすい点，比較しやすい点，理解しやすい点からエチオピアの民族舞踊を教材に選定した。

教材をデジタル化する理由は，デジタル教材では，3D マルチアングルで動きの提示ができるので，動きの特徴が分かりやすく，理解しやすくなるため，舞踊学習に適していると考えたからである。また，デジタル教材はアクティブラーニングを可能にし，その結果，学習者が個々に理解を深めることができると考えたからである。

１．研究の方法

第１にエチオピアで舞踊の人類学的な調査を行う。1960年に 舞踊そのものを人類学の研究テーマとした論文を発表したガートルード・クラース（Gertrude P. Kurath）は舞踊の人類学のパイオニアといわれている。宮尾は，「クラースによると，舞踊の研究はあくまでもフィールド調査で生の資料を収集することに多くの時間をかけなくてはならないとし，また民族舞踊の研究をするのは，舞踊だけを考えるのではなく，他の文化的側面との関わりを主題とするものであるとしている。身体動作だけではなく，フィールド調査と研究から理論を引き出し，観察と記録とともに文化としての舞踊を記述することが求められている」（宮尾 2003：14）と述べている。そのクラースに指導を受けたジョアン・ケアリノホモク（Joann W. Kealiinohomoku）（1974）は，アフリカなどの舞踊を研究し，ダンス・データ・ガイド（Dance Date Guide）を作成している。宮尾（2003）は，ダンス・データ・ガイドは舞踊を記述するのにきわめて有効的なアプローチであると評価しており，遠藤（1990）はダンス・データ・ガイドでヨルバの舞踊を調査し論文を発表している。本研究の舞踊の調査は，このダンス・データ・ガイドを用いて観察および記録を行っている。

第２に，人類学的な調査で収集した舞踊の資料をもとに，小学校高学年の授業で活用できる教材を開発し，その教材を活用した実践授業を行い，教材の有用性を検証する。

具体的には，居城（2008）にならい，教材の開発，実践，考察を行う。居城は，授業中の子どもたち発言を反応と捉え，その発言から児童の気づきや理解を分析し，盆ダンスの教材としての可能性について論じている。本研究で分析した授業は，デジタル教材を活用した自学自習であるため，ワークシートに書かれた児童の言葉を反応として捉え，成田（2010, 2013）に依拠して，事後の感想文とあわせて児童の気づきや理解を分析し，教材の有用性を検証する。

2．先行研究の検討

諸外国の民族舞踊の教材化についての先行研究には以下の報告があげられる。

インドネシア・バリ島の民族舞踊の教材化を研究している亀谷（1987[4]）は，中学生，大学生を対象に授業を実践している。亀谷は，受講生が民族舞踊の学習を通して多文化を肌で感じ理解することができたことを報告し，民族舞踊が社会と密接に関わり独自の美的価値観をもつため，それらも理解しながら学習する必要があること，発達段階に応じた教材の開発と学習内容の組み立てが大切であることを指摘している。また,「多民族や異なる文化の踊りを学習する場合は指導者が大変少なく，また直接教授を受けることが難しい状況であるといえる。そのためオーディオ・ビジュアルおよびマルチメディア教材の支援[5]を活用することが有効であると考える」(亀谷 2001：21）と提案している。

ブラジルの民族スポーツであるカポエイラの教材化を研究している細谷(2005, 2014, 2015, 2018, 2020)は，幼児，高校生，大学生などを対象にワークショップや授業を実践している。細谷は，カポエイラは舞踊的性格と格闘的性格を併せ持つ，ブラジルの民族スポーツであると述べている。細谷は，リオデジャネイロ市の幼稚園，小学校，中学校で，カポエイラの教授の様子を参与観察し，その身体技法の習得の傾向を人類学的視点から考察することで民族スポーツとしてのカポエイラを捉え，現地における教材化の実態を明らかにしている。細谷の授業では，身体技法だけでなくカポエイラに欠かせない民族楽器の演奏や手拍子，ポルトガル語の歌など儀礼的要素の習得も行う。

南インドのマーシャルアーツ，カラリパヤットの教材化を研究している高橋（2014，2018，2020）は，幼児や大学生を対象にワークショップや授業を実践している。高橋はカラリパヤットがアクロバティックな危険を伴う儀礼の舞踊を支えていること，現地の舞踊学校で身体づくりの基礎として実践されていることなどから，舞踊との深い関わりを指摘している。授業では身体技法に加え，信仰に関わる場面では左手は絶対に使わない，女神が祭られている南西方向に向かって一連の動作を行うなどの祈りの作法も取り入れている。高橋は，人類学的な調査で収集したデータを使って，伝承地で語られているカラリパヤットの効果や特性と自分の授業の履修者が得られる効果や特性を比較し検討している。

アフリカの民族舞踊の教材化を研究している遠藤（2014，2020）は，エチオピア，ナイジェリア，ガーナの民族舞踊をとりあげ，主に小学生や大学生を対象にワークショップを実践している。遠藤は，現地で行った人類学的調査をもとにアフリカの舞踊と社会を素材にした開発教育用のデジタル教材を制作し，実践に活用している。遠藤は,「本教材は，学習者の学習段階に応じて利用が可能であり，また自学自習に適し，舞踊の踊り方を的確に伝えやすくするため，伝承に有意義であると考えられる。さらに，ビデオ映像によって人々の生活を示し，スポーツ人類学の研究成果をもとに生活の背景にある文化や社会を紹介することは，開発教育の教材として有益である」（遠藤 2010：23）と述べている。

以上のような先行研究から，民族舞踊の教材化において人類学的な調査や考察が重要であると確認できる。また，民族舞踊の習得にはデジタル教材の活用が有効であることも確認できる。しかしながら，小学校現場で活用された教材は僅少である。よって小学校で活用できる教材を開発し，その教材を活用した実践授業を行い，教材の有用性を検証した本研究には意義があると考えられる。

3．開発した教材の概要

次に，開発した教材の概要に関して以下の点から述べる：３．１教材開発の過程　３．２教材の内容と学習のねらい。

３．１　教材開発の過程

３．１．１　調査地の選定

エチオピアはアフリカで3000年の間独立国として自国の歴史を築いてきた国であり独自の文字や宗教が現存している。また80以上の民族と言語，さらに複数の宗教を有する国であり，舞踊にもその多様性が反映されている（遠藤2001）。このようなエチオピア民族舞踊の特色を踏まえ，本研究ではアムハラ民族（Amuhara），グラゲ民族（Gurage），カファ民族（Kaffa）の舞踊の調査を行った（図１）。

この３つの民族舞踊を選んだ理由の１つ目は，動きの特徴である。アムハラ民族は肩，グラゲ民族は脚，カファ民族は尻に動きの特徴があるため，習得しやすく，また各民族舞踊の違いを理解しやすい。２つ目は，文化的な特徴である。アムハラ民族の祝祭はエチオピア正教（Ethiopian Orthodoxy Church）と，グラゲ民族の祝祭はエチオピア独自の風習と，カファ民族の祝祭はカファ王国時代の文化との関係が深く，それぞれの文化的背景を学びやすい。３つ目は言語である。アムハラ語，グラゲ語，カファ語の舞踊の歌を通して，児童は異なる言語を体験できる。以上の理由から，この３つの民族の舞踊をとりあげた。また，アムハラ民族は都市，グラゲ民族やカファ民族は農村で生活しているため，開発の進む都市と農村の生活を比較できることも理由にあげられる。

図１　エチオピアの調査地

（筆者作成）

３．１．２　調査日程および調査方法

2014年９月１日～９月17日，2015年９月７日～９月30日，2016年９月１日～2016年９月15日にアディスアベバ，デセナ，ボンガにて民族舞踊の調査を行った。

調査方法は，参与観察[6]，聞き取り調査[7]，ビデオカメラおよび簡易モーションキャプチャ：キネクト[8]（以下『キネクト』と略称する）による民族舞踊および舞踊動作の収録[9]，文献調査である。

３．１．３　調査で得られた教材の資料

2014年９月10日にアディスアベバで調査したエンクタタッシュ（Enkutatash）の前日に踊られた「ホイヤホイエ」（Hoya Hoye），2015年９月26 日にデセナで調査したマスカル（Masqal）の「ヤベライサメレ」（Yabarai Smare），2015年９月21日にボンガで調査したカフェチョニューイヤー（kaffecho New Year）の「ハヘハママ」（Haye Hamama）を教材にとりあげた。

調査で明らかになった各舞踊の詳細と取り上げた理由は，以下のとおりである。

①「ホイヤホイエ」

2014年９月11日は，新年の祭，エンクタタッシュであった。その前日，日が暮れると，少年達が家々の庭先を周り，歌いながら，手に持っている木の杖で地面を叩き始めた。しばらくして歌が軽快になると，少年達は地面を杖で叩きながら円をつくり，反時計回りに走り出した。周りで見ている人が，少年の歌に合わせて「ホッ」とかけ声をかけ，舞踊を盛りあげる。少年達の歌と舞踊は，家の人がリーダーに小遣いを渡すまで続けられた。この舞踊は，「ホイヤホイエ」と呼ばれ，エチオピア正教会の司祭の儀式舞踊を真似したものである。少年達の杖は，司祭が舞踊に使う杖を模していて，成人するまで毎年同じものが使われる。「ホイヤホイエ」は，恐ろしい稲妻や雷をひきおこした暗い季節の終わりに，少年（未婚男子）が先陣を駆け抜け，春を出迎えるための舞

踊である。その日の最後には，チボー（Chibo）を燃やし，その火を家族みんなで囲む。チボーは乾燥したユーカリの束で「たいまつ」と訳されている。燃える火には，今年の凶を焼きつくし，すばらしい年を迎える準備をするといった意味がある。アムハラ語の「ホイヤホイエ」は「さぁ，さぁ」等であり，かけ声の「ホッ」は「そうだ」などの返答になる。児童と同年代の少年達が宗教的・社会的役割を担って踊っていた点を重視して，「ホイヤホイエ」を本教材にとりあげた。

②「ヤベライサメレ」

2015年９月26日，マスカルの夜，暗くなると男性は家の中に用意してあった自分のチボーに火をつけた。彼らは燃えているチボーを持ち，ゴレゴレ（Goregore）と言いながら，玄関や，家の中心にある柱，裏口，家具，家畜などを清めた。ゴレゴレには「良い年になりますように」という願いが込められている。そして，家の前に建てられていたデメラ（Demera）を燃やし，その火を囲い，火が燃え尽きるまで家族や友人と歌い踊っていた。デメラとは，乾燥した枝の束をたてかけ円錐形に組み立てたものであり，一番上には，枝で編んだ十字架が飾られている。川又は，「エチオピアではマスカル祭と呼ばれており，この枝を編んだ十字架（マスカル）を燃やす火祭りとなっている。この火祭りは本来の十字架挙栄祭とは関連がないエチオピア独自の風習であり，雨季明けの農耕儀礼の名残であるとされている」（川又 2005：169）と述べている。さらに，鈴木も「この日は，ユダヤ教のみならず，エチオピアの異教徒にも祝われているから，キリスト教以前の季節の祝いに根差していることは明らかである」（鈴木 1969：93）と指摘していて，マスカルがエチオピアで古くから受け継がれてきた貴重な祝祭であることが分かる。「ヤベライサメレ」は新年や祝日に歌い踊られるグラゲの代表的な舞踊である。グラゲ語で「ヤベライサメレ」は「かがやかしい日」を意味し，かけ声「アエー」は「そうだ」などの返答である。マスカルがエチオピアで最も盛大に舞踊が踊られる祭りである点，エチオピア独自の風習である点を考慮して，本教材にとりあげた。

③「ハエハママ」

エチオピアの新年はエチオピア正教会によると西暦の９月11日（閏年12日）であるが，カファ地方の人々は新年を９月20日（閏年21日）としている。これはカファ王国時代の新年に由来している。この新年の祭りは宗教に関係なく執り行われるのですべての人々が参加できる。2015年９月21日の「カフェチョニューイヤーフェスティバル」はボンガの王族の土地で行われ，王族の子孫が人々のために祈りを捧げていた。カファ県の10行政地区から来た大勢の人々は，新年の朝ボンガの王族の土地に参り，祈り，歌い，踊り，祝う。そして，王族の土地に建てられている地区の家に泊まり，新年から翌日の朝まで夜通し踊り明かす。人々の舞踊にはバッファローの角の被り物，狩りに使う槍や鉾，象牙の笛が使われ，カファ王国時代の生活や富が反映されていた。「ハエハママ」は，新年や祝日に踊られるカファの代表的な舞踊である。カファ語で「ハエハママ」は「出発しよう」などの意味であり，かけ声の「へー」は「そうだ」「そうしよう」などの返答である。19世紀後半，カファ王国がエチオピア帝国に編入され，アムハラ民族出身の行政官による統治が行われると，在来宗教からエチオピア正教への政治的な改宗が行われ，カファの伝統的な文化が薄れ，アムハラ民族の慣習が人びとの生活に浸透していった。舞踊においても，アムハラ民族のように主に上半身で踊る舞踊が高尚とされ，カファ民族のように主に下半身で踊る舞踊は低俗なものとみなされていた。しかし，1994年エチオピア人民革命民主戦線が連邦政府憲法を制定し，すべての「民族」の自決権を認めたことから，現在は「民族」を主体とした地方分権化が推進されている。「カフェチョニューイヤーフェスティバル」はその象徴であり，エチオピアの民族の歴史を知るうえで重要である点を勘案し，本教材にとりあげた。

３．２　教材の内容と学習のねらい

本研究で開発したエチオピアの民族舞踊のデジタル教材のタイトルは,「エチオピアの社会と舞踊」[10)]（以下『本教材』と略称する）である。

遠藤は「アフリカの舞踊の実践には，以下を考慮することが重要である。1．アフリカと日本の舞踊や社会に興味関心を持ち，両者の共通点や相違点を理解し，相対的に見る視点を養うようにする。その際,料理の紹介や試食も効果的である。2．アフリカの舞踊の実践に際しては，他の児童と一体感味わうことができ，練習すればすぐにできそうなリズミカルな１フレーズを抽出する。3．上記２の舞踊は,いつだれが,何の目的で踊るのかを教える。4．今日のアフリカの舞踊の現状や課題を知り，課題を解決するために何をするべきなのかを考える」（遠藤 2013：11）と記述している。上記の先行研究を根拠に，本教材では「A. 調べてみよう！」,「B. 歌ってみよう！」,「踊ってみよう！」の３つの柱を立て,小学校の45分授業での活用を考慮して,約30分で構成した（図２）。次に，それぞれの内容と学習のねらいについて述べる。

３．２．１「A. 調べてみよう！」

「A. 調べてみよう！」の（1）「エチオピアはどんな国かな？」では，エチオピアに関する基本的な情報を学習する。本教材では，児童が興味や関心をもちやすい情報を提示する，場所や数値などを日本と比較して分かりやすくする，平均年齢などエチオピアのマイナス面も含めて情報を提示する，一問一答式のクイズ形式で学習するなどの工夫をした。設問は,①世界地図上の位置,②日本からのアクセス,③国土面積,④首都,⑤人口,⑥宗教,⑦主な産業,⑧主食,⑨平均寿命の全９問である。

「A. 調べてみよう！」の（2）「どんどん変わる人々の生活　最新情報」では，開発が進むアディスアベバの様子を学習する。本教材では，建設現場，ゲームセンター，ライトレールなど児童が開発の現状を理解しやすい題材を選び，50秒の写真と映像に編集した。

「A. 調べてみよう」の（3）「友達をさがしに行こう！」では，アディスアベバ，デセナ，ボンガの新年の祝祭について学習する。本教材では，家，衣服,食事，家族，学校などを映像に含めながら，各祝祭に関わる子供の様子を中心に映像を編集した。これは，児童がエチオピアの子供の姿を通してエチオピアを身近に感じられ，また，エチオピアの子供と自分を比較しながら学習できると考えたためである。また，前述の遠藤の指摘を参考に祝祭の準備から本番までを映像に含め，児童が,「いつ，だれが，何の目的で踊るのか」学べるように配慮した。

各民族の映像の詳細は，以下のとおりである。

①アディスアベバ（アムハラ民族）は，父によるニワトリやヤギの屠殺，母の徹夜の料理，未婚の男子の大晦日の舞踊「ホイヤホイエ」,未婚の女子の新年の舞踊「アディアベバ」（Ady Abeba），エチオピア正教の教会の新年の儀式と礼拝が含まれる４分22秒の映像である。

②デセナ（グラゲ民族）は，伝統的な家屋，新年の朝の様子，デメラ作り，牛に捧げる祈り，牛の屠殺，年に一度の特別なごちそう，チボーによる家屋の清め,「ヤベライサメレ」が含まれる３分03秒の映像である。

③ボンガ（カファ民族）は，コーヒーの木，新年の祭りの朝，山頂への登山，馬の民族衣装，人の民族衣装や髪型，化粧，たいまつと牛への祈り，伝統的な食事とコーヒー,「ハエハママ」が含まれる２分47秒の映像である。

３．２．２「B. 歌ってみよう！」

「B. 歌ってみよう！」では，アディスアベバの歌「ホイヤホイエ」（アムハラ語),デセナの歌「ヤベラ

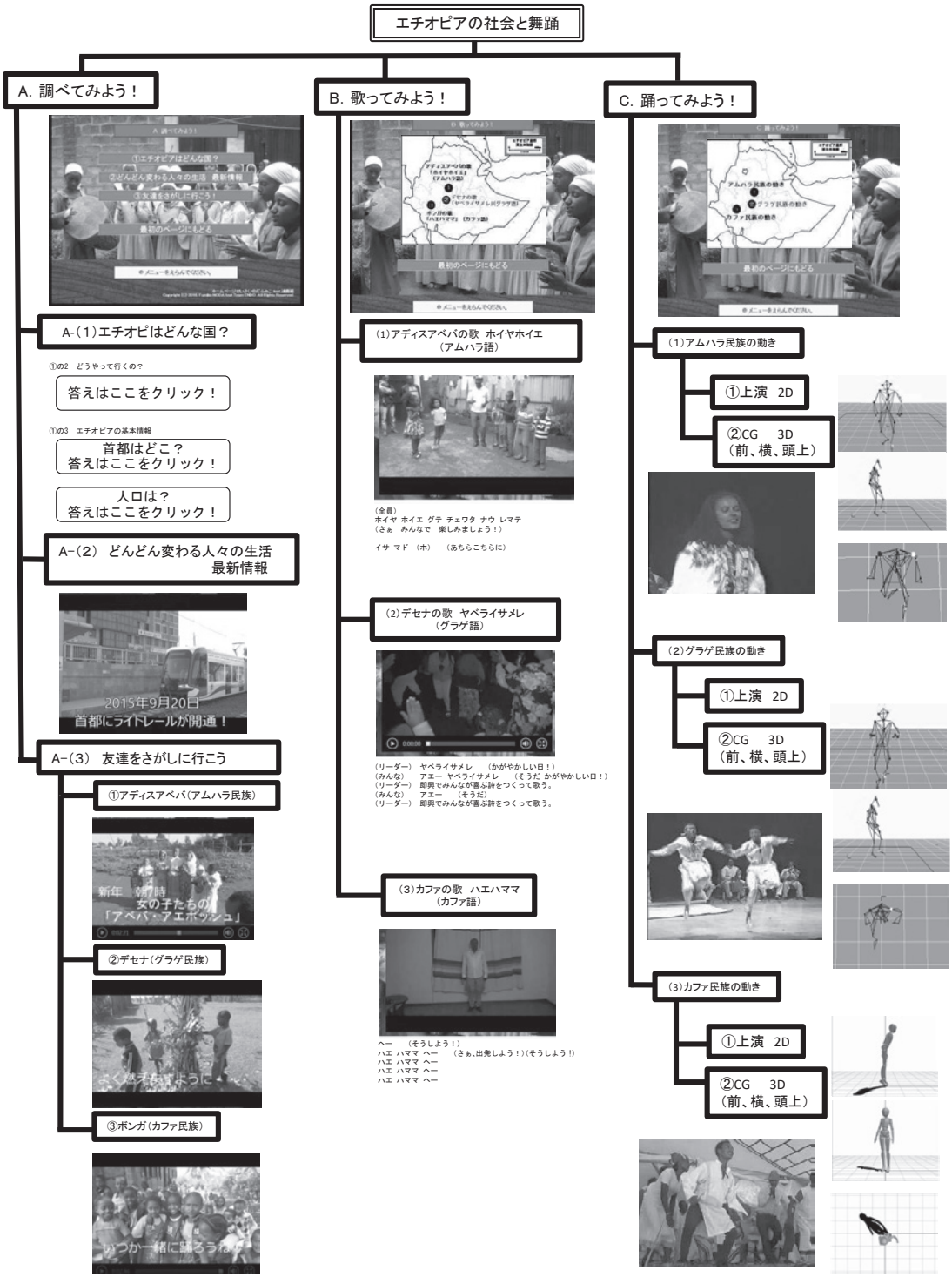

エチオピアの社会と舞踊
A. 調べてみよう！
B. 歌ってみよう！
C. 踊ってみよう！
A-（1）エチオピはどんな国？
①の2　どうやって行くの？
答えはここをクリック！
①の3　エチオピアの基本情報
首都はどこ？
答えはここをクリック！
人口は？
答えはここをクリック！
A-（2）　どんどん変わる人々の生活
最新情報
2015年9月20日
首都にライトレールが開通！
A-（3）　友達をさがしに行こう
①アディスアベバ（アムハラ民族）
新年　朝7時
女の子たちの
「アベバ・アエボッシュ」
②デセナ（グラゲ民族）
よくムズカしいように
③ボンガ（カファ民族）
いつか一緒に踊ろうね
（1）アディスアベバの歌　ホイヤホイエ
（アムハラ語）
（全員）
ホイヤ　ホイエ　グテ　チェワタ　ナウ　レマテ
（さぁ　みんなで　楽しみましょう！）
イサ　マド　（ホ）　（あちらこちらに）
（2）デセナの歌　ヤベライサメレ
（グラゲ語）
（リーダー）　ヤベライサメレ　（かがやかしい日！）
（みんな）　アエー　ヤベライサメレ　（そうだ　かがやかしい日！）
（リーダー）　即興でみんなが喜ぶ詩をつくって歌う。
（みんな）　アエー　（そうだ）
（リーダー）　即興でみんなが喜ぶ詩をつくって歌う。
（3）カファの歌　ハエハママ
（カファ語）
ヘー　（そうしよう！）
ハエ　ハママ　ヘー　（さぁ、出発しよう！）（そうしよう！）
ハエ　ハママ　ヘー
ハエ　ハママ　ヘー
ハエ　ハママ　ヘー
（1）アムハラ民族の動き
①上演　2D
②CG　3D
（前、横、頭上）
（2）グラゲ民族の動き
①上演　2D
②CG　3D
（前、横、頭上）
（3）カファ民族の動き
①上演　2D
②CG　3D
（前、横、頭上）

図２　教材の構成

イサメレ」（グラゲ語），ボンガの歌「ハエハママ」（カファ語）を学習する。本教材では，児童が歌いやすい部分を抜粋する，カラオケのように映像にあわせて歌えるように，歌詞をスクロール可能にするなどの工夫を行い，本教材を使って児童が自分で歌を練習できるように開発した。

各民族の内容は，以下のとおりである。

①アディスアベバの歌（アムハラ語）は，「ホイヤホイエ」の歌詞と，舞踊を含む24秒の映像である。

②デセナの歌（グラゲ語）は，「ヤベライサメレ」の歌詞と，舞踊の映像を含む30秒の映像である。

②ボンガの歌（カファ語）は，「ハエハママ」の歌詞と，舞踊の映像を含む34秒の映像である。

３．２．３ 「C. 踊ってみよう！」

「C. 踊ってみよう！」では，アムハラ民族の動き，グラゲ民族の動き，カファ民族の動きを学習することができる。本教材では，ビデオカメラで収録した2D の映像と，モーションキャプチャまたはキネクトで撮影した3D のマルチアングル映像の両方を使って，舞踊を自分で習得できる。3D の映像は，前述の遠藤の指摘を参考に「練習すればすぐにできそうなリズミカルな１フレーズを抽出」して編集をした。

「C. 踊ってみよう！」の（1）では，アムハラ民族の動きを①2D と②3D で，「C. 踊ってみよう！」の(2)では，グラゲ民族の動きを①2D と②3D で，「C. 踊ってみよう！」の（3）では，カファ民族の動きを①2D と②3D で提示した。

各民族の動きの詳細は，以下のとおりである。

①「アムハラ民族の動き」

アムハラの民族舞踊はいろいろな肩の動きで踊られる特徴があるので，ショルダーダンスとも呼ばれている。その肩の動きを総称してエスケスタ(ëskësta) という。ヴァダシー (Vadasy) (1970:120) は，エスケスタは「穏やかな愛情や好戦的な意識の高揚，最高潮の喜びなどのさまざまな感情をあらわす動き」と記述している。筆者（池田[11] 2000）の調査からその語源は「なめらかに」を意味するアムハラ語 ëskës（エスクス）あり，「エスケスタ」に関わる上半身の動きは，首の動きから派生していることが分かっている。下半身は内股で構えた姿勢から，あまり動かさずその場での足の動きが多い。肩だけでなく体全体を滑らかにできるだけ早く震わせたりするなどの舞踊の様子から，上半身の滑らかな動きの連動が重要であると分かる。映像は約１分。CG の動きは18秒。

②「グラゲ民族の動き」

ヴァダシー（1971:204）は，グラゲの民族舞踊の特徴にリズミカルな喉声があげている。この喉声を合わせることは，「仲間意識の象徴であり，神への祈り」だと筆者の調査で明らかになっている（池田 2000:16)。男性は喉声と共に全身を使った激しい動きをできるだけ速く，長時間，続けることが強さと評され，女性は低く，太い喉声と共に太い肢体を小刻みにできるだけ長く揺することが美しさと評される。膝を胸に付けるように高く蹴り上げて体を前掲させ，２拍の片足飛びのリズムに合わせて顔に水をかけるように手を叩きながら踊ったり，片足飛びをしながら前後に体を揺り動かし，体全体で８の字を描くように踊ったりする。映像は約１分。CG の動きは13秒。

③「カファ民族の動き」

カファの民族舞踊は筆者の聞き取り調査から，「毎日の生活を追随するものであり，未来への祈り」だと明らかになっている[12]。基本的に男性は片足ずつ跳躍しながらリズムをとり，女性は両足を地面につけたまま跳躍しリズムをとる。女性はできるだけ足が地面から離れない方が良い動きとされる。この足の跳躍は尻を突き出すような下半身の滑らかな動きへと連動していく。上半身の動きは即興でつくられることが多い。カファでは，通常２～３時間祝いの

舞踊が続く。そのため，激しく速く動くことよりも，できるだけ長く跳躍を続けられること，長く舞踊に参加できることが求められる。映像は約20秒。CGの動きは１分30秒。

４．本教材を活用した実践授業

次に，本教材を活用した実践授業について，以下の点から述べる：４．１活動の展開，４．２活動の様子，４．３活動における児童の学び。

４．１　活動の展開

本教材を活用して，2016年２月23日にＳ市Ｋ小学校５年１組38名を対象に実践授業を行った[13)]。単元計画（表１）は，小学校５年生の「総合的な学習の時間」で全４時間に設定し，単元名は「エチオピアの民族舞踊を調べてみよう！歌ってみよう！踊ってみよう！」，単元の目標は以下のようにした。本時は，表１の３時間目に相当する。

○エチオピア人の生活や慣習を知り，多様性や違いを認め，仲良くしようとする態度を養う。

○エチオピアに興味を持ち親しむと共に，外国への興味・関心を育てる

○エチオピアの民族舞踊を体験し，異なった文化や価値観があることに気づき，積極的に関わろうとする意欲を養う。

４．２　活動の様子

本時，３時間目は，朝の活動の時間に本教材の使い方を説明した後，２人で１台のパソコンを使用しながら，45分間の調べ学習を自由に行った。調べたことは，ワークシート[14)]（資料1）に書き込むことを指示した。

多くの児童が，３つの舞踊が，いつ，どこで，だれが，何のために踊るのかを理解し，疑問に思ったことや分からなかったことを解決して，45分間集中して学習していた様子がみられた。

４．３　活動における児童の学び

本時の児童の学びを考察する。観点別学習状況の評価の観点[15)]にあげられている「関心・意欲・態度」，「思考・判断・表現」，「知識・理解」について考察する。なお「技能」については，主に１，２時間目および４時間目の活動を通して考察をおこなった。本時の考察は，児童が活動中に作成したワークシートの記述内容（表２）を読み取った。

４．３．１　関心・意欲・態度

「歌が楽しかった」，「踊りが楽しかった」，「ダンスの動き方が楽しかった」など目で見て，耳で聞いて，体を動かして学習できる本教材から，児童が民族舞踊の楽しさを感じていたことが分かった。「家族みんなで踊るというのがおもしろかった」，「ハエハママの歌（カファ語）がおもしろかった」，「ダンスの足の動きがおもしろかった」など，児童がいろいろな視点から民族舞踊をおもしろいと捉えていたことが分かった。さらに，新年の行事に関わる風習や生活に興味をもつ児童もおり，「生肉を食べているのにおどろいた」，「コーヒーにバターを入れるのにおどろいた」のように自分が想像しにくいことや，自分の生活とかけ離れていることに驚きを示していたことが読み取れた。

４．３．２　思考・判断・表現

「グラゲ民族の歌が即興なので私だったらなんていうかなと考えた」，「なぜ牛に祈りを捧げるのが考えた」，「なぜ教会で新年を迎えるのかが分からなった」「なぜ松明を燃やすのかが分からかった」など新年の風習の意味を問うもの，また，「なぜコーヒーにバターを入れるのか」，「なぜ生肉を食べるのか」など自分とは違った食文化を問うもの，「肩をとにかく動かしていたのが分からなかった」，「ヒッヒッヒッというのがなぜなのか分からなかった」，「こんなダンスだれがつくったのか」，「ダンスは何のためにやるのか」など，ダンスの意味を問うもの，「同じ国でも場所が違ったら言葉が分からないことがあるのは

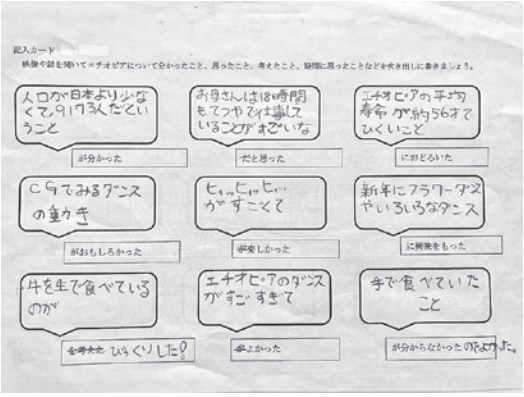
表１　単元計画

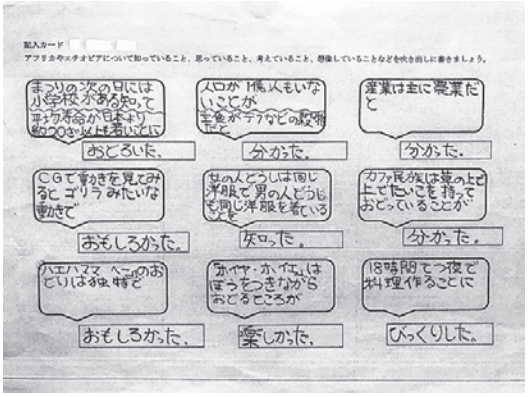
１．単元名（対象学年）　エチオピアの民族舞踊と国際理解に関する学習（小学５年）		
２．実施時期と総時数　2016年２月22,23日　全４時間		
３．教科領域との関連性　体育、音楽、社会と関連づけながら総合的な学習の時間を使う。		
４．単元目標 ○エチオピア人の生活や慣習を知り、多様性や違いを認め、仲良くしようとする態度を養う。 ○エチオピアに興味を持ち親しむと共に、世界への興味・関心を育てる。 ○エチオピアの舞踊を体験し、異なった文化や価値観があることに気づき、積極的に関わろうとする意欲を養う。		
５．展開		
時	主な学習活動	留意点
１．２ 時間目	○エチオピアの舞踊を学習してみよう ・「ホイヤホイエ」、「ハエハママ」、「ヤベライサメレ」の歌と踊りを体験する。	・教材「エチオピアの社会と舞踊」のＡ調べてみよう！（1）エチオピアはどんな国？を使って５分程度のエチオピアの紹介をする。 ・それぞれの歌の歌詞カードを配る。 ・エチオピアでは、「歌う」と「踊る」をあわせてダンスであることを伝える。 ・歌、踊りの説明や練習は短時間で行い、まずは児童の身体的実感を重視する。
３ 時間目 （本時）	○教材「エチオピアの社会と舞踊」を使って調べ学習をしよう ・２人で１台のパソコンを使い、教材の「Ａ調べてみよう！」、「Ｂ歌ってみよう！」、「Ｃ踊ってみよう」を活用して調べる。 ・調べたことをワークシートに書き込む。	・教材「エチオピアの社会と舞踊」を使って自由に調べ学習を進めさせる。 ・上記教材にクイズ形式の質問を取り入れて、学習しやすく工夫する。 ・上記教材に児童と同年代の子どもを登場させて、エチオピアに親しみやすくする。 ・上記教材に3D マルチアングル映像を取り入れて、動きを理解しやすくする。 ・上記教材に一緒に歌えて踊れる映像を取り入れ、歌や踊りの練習も可能にする。 ・分かったことをワークシートに書くように指示する。
４ 時間目	○エチオピアの舞踊をもう一度学習しよう ・「ホイヤホイエ」、「ハエハママ」、「ヤベライサメレ」がいつ、どこで、どんな人が、何のために踊っているのかをみんなで考えながら再体験する。 ・それぞれの踊りの特性にあわせて自分なりの表現（歌や踊りの即興）で参加する。	・新年の祝祭をイメージできるように「学習の仕上げにダンスパーティーをひらこう！」と声をかける。 ・それぞれの踊りの特性が思い出せるように質問をしたり、意見を聞きながら学習を進める。 ・踊りの輪をつくる一員として積極的に参加できているかどうか、ひとりひとりが表現できる時間を設定し確認する。
６．評価 ○エチオピア人の生活や慣習を知り、多様性や違いを認め、仲良くしようとする態度を養うことができたか。 ○エチオピアに興味を持ち親しむと共に、世界への興味・関心がもてたか。 ○エチオピアの舞踊を体験し、異なった文化や価値観があることに気づき、積極的に関わろうとする意欲がもてたか。		

なぜなのか」といった多言語社会への問い,「日本より平均寿命が短いことを考えた」,「日本との人口密度の差を考えた」などの日本との違いなど，児童が教材で「分からなかった」ことをみつけ，さらに「知りたい」と思い，自分なりに「考えよう」,「やってみよう」とする思考や判断が読み取れた。

４．３．３　知識・理解

「日本とは違って手でご飯を食べていることが分かった」,「お祭りの時は食事にお金を使わないこと





資料１　ワークシート（左：１枚目，右：２枚目）

が分かった」など，児童自身の気づきが多く書かれていた。また，「裸足で歩いていてすごいと思った」，「ダンスが激しいところがすごいと思った」や「せんたくを手洗いでするのは大変だと思った」，「山頂まで登るのは大変だと思った」など「すごい」や「大変」が多く使われ，児童が自分の生活を基準にしながら，自分と比較して理解していることが読み取れた。さらに，「笑顔がすてきでよかった」，「みんなの明るさがよかった」など，エチオピアの人々の様子を読み取っていた。

５．本教材の有用性

以上のことから本教材の有用性は以下の４点にまとめられる。

第１に，本教材を活用して，児童がエチオピアの民族舞踊の社会的役割に気づけた点である。児童は，「エチオピアの民族舞踊は，みんな（大人と子ども，家族，村人，民族）で踊るものである」と理解することができた。そのため，実践終了後の感想（以下，『感想』と略称する）[16] には，「踊りが，みんなで楽しむものであることが分かった」，「日本にはない文化だと思った」，「そのような風習があるエチオピアの人がうらやましい」と記述されていた。アムハラ民族にとっての民族舞踊とは，みんなを楽しく，幸せにする歌や舞踊のことであり，グラゲ民族の民族舞踊では人々に喜びを与える歌と舞踊が求められ，カファ民族では祝うためにみんなで集まることが民族舞踊であった。

感想には，「私は，なぜみんなで踊ったりするのかなぁと思いました。私の予想は，みんなと絆をふかめて，協力して，助け合うためかなと思いました」と書かれていた。このように，児童がエチオピアの社会における民族舞踊の大切さに気づき，なぜ踊るのかを考え，民族舞踊の社会的役割について自分の考えを述べたことは重要な学びであり，民族舞踊が異文化理解すなわち人類学的教材として意味があることを示しているといえよう。

第２に，エチオピアの民族舞踊を通して，エチオピアの人々が家族で協力し，仲良く，明るく，楽しく，力強く生きている様子を学習できた点である。西岡（2007:84）は，「特に第三世界が『ネガティブに彩られる』ことを，小学校段階の教科書では『意識的に避ける』ことを提案したい」と述べ，「世界地誌でも初心者には『入門しやすいテーマ＝文化的事例』（例えば家族，市場風景，街並み，学校の様子，スポーツ）から，『応用問題テーマ＝経済活動から発生する社会問題・環境問題など』へと，段階を経て学習を進める必要がある」と指摘している。その点において，民族舞踊を題材とした本教材は小学生段階の学習に適していたと考えられる。

一方で，エチオピアには，紛争，飢餓，貧困，病

表２　ワークシートの児童の記述

ふきだし(下)内容	回答数	ふきだし（上）記述内容抜粋
分かった （知った含む）	76	・国土面積が日本の約３倍 ・人口が日本より少ない ・主な宗教がキリスト教やイスラム教 ・主な産業は農業で、穀物、豆、コーヒーが盛ん ・エチオピアの都市は開発すすんでいてとても文明が栄えてる ・日本とは違って手でご飯を食べている
思った	54	・ダンスが激しいところがすごい ・ダンスが楽しそう ・お母さんが18時間も徹夜で料理していることがすごい ・せんたくを手洗いでするのが大変 ・牛に祈りをささげるのがめずらしい ・笑顔がとてもかわいい
おどろいた （びっくりした含む）	88	・大みそかにニワトリやヤギをお父さんが屠殺している ・お肉を生で食べていた ・ロバが荷物を運んでいた ・コーヒーにバターをいれる ・まちでロバが荷物を運んでいる ・日本との平均寿命の違い
おもしろかった	33	・CG で見るダンスの動き ・大人と子どもが一緒におどっていたところ ・いやなことをやきつくすところ ・カファ語が ・教会で寝ている
楽しかった	24	・歌やおどり ・ホイヤホイエで棒をつきながらおどるところ ・ハエハママのダンスの動き方 ・ヒッヒッヒッがすごいこと ・笑顔でみんなが踊っている
興味を持った （○○したい含む）	34	・エチオピアの食事 ・エチオピアの言葉 ・エチオピアの産業 ・歌とダンス ・みんなが仲の良いところ
考えた	19	・もうちょっと平均寿命はのびないのか ・同じ国でも場所が違ったら言葉が違うのはなぜなのか ・ダンスはだれが考えたのか ・ヒッヒッヒッというのはなぜなのか ・即興のところは私だったらなんていうかな
よかった	22	・エチオピアのダンスがすごすぎ ・みんなの明るさ ・都市の様子が日本みたい ・家族みんなで踊ること ・「ヤベライサメレ」の意味が「かがやかしい日」だったこと
分からなかった （不思議だった含む）	25	・なぜ生肉をたべるのか ・なぜ、牛に祈りをささげるのか ・なぜ、たいまつを燃やすのか ・なぜ、肩をとにかく動かしているのか ・ダンスはなんのためにやるのか

気などがあり，児童の感想に書かれた「日本と同じ平和で楽しい国」ではない一面があることも事実である。西岡が提言しているように，教材においてもその事実で「ネガティブに彩る」ことは避け，児童がその事実に自分で気づき，考え，答えを導き出すための「入り口」をどう提示できるかが大切だと考える。ワークシートに「もうちょっと寿命がのびないのかなということを考えた」と書いた児童は，感想で「平均寿命が短いのはなぜですか。やっぱり標高が高いからですか。なんにしろ，寿命が短いので，１分１秒でも多く，家族や友達と一緒に過ごして下さい。エチオピアの子どもたちがんばって生きてください。がんばれ！」と記述している。なぜ，平均寿命が短いのか，もうちょっと寿命が延びないのか，寿命が延びるためにはどうしたら良いのか，を考えることは，エチオピアの人々が抱えている問題を知り，解決していくきっかけになるだろう。このような児童の気づきは，今後本教材を深めていくうえで重要な視点だと捉えたい。

第３に，「分からない，理解できない，でもやってみたい」と児童が考えられた点である。記入ワークシートに「手で食べていたことが分からなかった」と記述した児童は，感想に「日本は『はし』というものを使って食前に『いただきます』，食後に『ごちそうさまでした』という独特な風習があります。エチオピアは手で食べるんだよね⁉　私びっくりした！でもいいね！やってみたい！」と記述している。このような「分からない，理解できない，でもやってみたい」といった児童の考え方は，教える側が注目すべき重要な視点だと思われる。授業の目標には，「知る」，「分かる」，「理解する」等の言葉がよく使われている。しかし，児童が学習しても「分からなかった」，「理解できなかった」と思うことは，そのこと自体に意味があり，学びがあるのではないだろうか。児童が教師から「教わる」のではなく，デジタル教材を活用してエチオピアの社会と向き合ったからこその気づきだといえよう。そして児童の「でもやってみたい」という行為が，異文化の相手を受容する第一歩になるのではないだろうか。

本教材を活用した授業では，児童がそれぞれにエチオピアの異なる価値観や行動，民族舞踊や民族舞踊の背景にある文化と出会う体験をつくりだしており，そのことが教える側の用意した答えだけではない，多様な児童の答えを導き出したといえよう。

第４に，小学校の異文化理解には人類学的な調査や考察を踏まえた知見が有効だと分かった点である。人類学的な調査を行って開発した本教材を活用した授業では，児童１人１人がさまざまな視点から，エチオピアの人々，民族舞踊，風習，生活，食事などを学習することができていた。

磯田は，多様な民族と共生する『行動』を育成するためには，「異文化と他の民族の独特の価値観，思考に出会う機会を授業で提供することである。つまり，実際の社会を想定して，異文化と出合い，その中で音楽を通して協力していく疑似的な社会体験をすることができる場へと音楽の授業を換えていかなければ実現しない」（磯田 2000：20）と述べる。その提言から考えると，本デジタル教材が果たすべき役割は，児童が民族舞踊を通して疑似的なエチオピアの社会体験ができる場をつくりだすことだといえないだろうか。

６．結語

以上から本論文の結論は，次のようにまとめられる。第１に，人類学的な調査を踏まえて開発したアフリカの民族舞踊のデジタル教材が小学生の異文化理解教育に有効であること，第２に，人類学的な調査を踏まえて開発したアフリカの民族舞踊のデジタル教材には，児童が疑似的社会体験できる場をつくりだせる可能性があることが見出せたことである。

アフリカの民族舞踊には，いつ，だれが，どのくらいの時間，どのような目的で，どのような歌で，どのような動きで，どのような恰好で，どのようなものを用意しながら，どのようなことを考えながらなど，さまざまな社会文化的背景が深く関わっている。

つまり児童がアフリカの民族舞踊を歌い踊ることは彼らの生活や社会を体験することである。だからこそ，そこで出会う自分とは異なった身体性が，彼らの社会で長い時間かけて育まれてきたものだと気づくだろう。そしてそのような学びは，運動やスポーツを文化として捉えている近年の学校教育[17]において，異文化理解としての舞踊学習の可能性を示唆することになるのではないか。

今後は，さらにどのような人類学的な知見が児童の学習に役立つのか，またそれらの知見をどのような形でデジタル教材に取り込んでいけば良いのか，引き続き検証していくことを課題としたい。

注

1） 寒川（2019:50）は，「スポーツ人類学研究がこれまで，“教育を前提とする研究”に積極的ではなく，成果を学校教育に還元する意識と意欲に欠けていたことは反省すべき内容であろう」と指摘し，「国際交流と異文化理解（また日本文化理解）の必要性が体育の授業で要請される現状は，こうした問題を論じてきたスポーツ人類学会の成果を還元するチャンスの時であろうといえよう」と言及している。また，2018年の日本体育学会第68回大会では，スポーツ人類学の専門領域のシンポジウムにおいて，スポーツ人類学の教育成果を「教育」に還元する方法について討議がされた。また，2019年の日本体育学会第69回大会同シンポジウムで，民族スポーツの教材化をはじめ，スポーツ人類学が文化理解教育にどのように貢献できるかがとりあげられ，話題提供および全体討論がされている。

2） SDGsの17のゴールのなかでもESD（持続可能な開発のための教育）が位置付けられているゴール４「質の高い教育をみんなに」のターゲット4.7は持続可能な社会の実現に資する人材育成が目標とされていて，日本など先進国の課題になっている。

3） エチオピアのコーヒーを扱った教材には，織田（2010）がある。

4） 著者は亀谷真知子（執筆時は，猪原）。

5） 1995年に，仁科ら（1995）が「民族舞踊のためのマルチメディア学習システム“ガムランの技法”音楽編・舞踊編」の開発について報告している。仁科らによれば，この教材では学習方法に対応して①テキストブックモード，②ビデオレクチャーモード，③リピート練習モードを設定し，各モードにインデックス画面を設け学習者が自在に検索することを可能にしている。前述の①では，インドネシアのバリ島音楽や舞踊の専門家およびバリ島の文化全般に精通した文化人類学者を含めた共同作業で文字情報と静止画像でデータ―ベースを開発し，文化特有の発想法，コミュニケーション・スタイル，社会，風土，自然などに関する膨大な基礎情報を学習者に提供している。また前述の②では，60分間の動画がレーザーディスクにおさめられており，バリ島舞踊の代表的な所作の要点が実演とともに説明され，現地バリ島の本格的な舞踊が収録されている。さらに，ここでは，体の部位ごとに基礎的な所作を分類し，前面，背面，側面（左・右の２面）という４面から撮影した動画像を１組とする模範演技が収録されている。前述の③では，30種の所作や複合的な基本所作を練習できるようになっており，くり返し練習することによって，バリ島舞踊の基本的な所作が体得されるだけでなく，１曲の舞踊を通して踊ることができるようになる。また③で特記すべきことは，音声認識によるリクエストコントロールシステムで再生のくり返しや速度の調節を音声で要求することが可能になっていること，学習者が「鏡像」と命令すると，学習者の映像が瞬時に左右反転し，指導者と学習者相互の映像の向きが一致したものを，モニターに映し出すことができることである。仁科らは，このようなシステムはあたかも指導者と対面して学習しているかのような機能および学習者のペースに完全に合わせて学習をすすめることができるような学習者適応機能をもったインタラクティブ実技学習教材システムだと述べている。

6） 祝祭および舞踊の参与観察は，ケアリノホモクのダンス・データ・ガイドを用いて実施した。

7） 聞き取り調査の詳細は，以下のとおりである。

2014年９月２日 Temesgen Yohannes 氏（エチオピア正教の研究者・アディスアベバ大学民族博物館副館長），2014年９月12日 Tomasu Haill 氏（国

立劇場トラディショナルダンサー），2014年９月14日 Zerihun Bekle 氏（国立劇場トラディショナルドラム演奏者），2014年９月15日 Maicheal Melake 氏（エチオプスアート舞踊団代表者）にアディスアベバで，また，2015年９月23日 Atnafie Gobena 氏（カファの音楽教師），Ashebir Hayile 氏（カファの民族舞踊教師）にボンガで，さらに，2015年９月27日 Asegedech Difek 氏（元 Ethiopia Police Music and Theater の舞踊手），2015年９月27日 Girma Anssa 氏（グラゲの民族舞踊手）にデセナにて実施した。なお，質問項目はケアリノホモクのダンス・データ・ガイドを参考に作成し，半構造化インタビューを行った。

8）　教材の記録および編集で活用した ICT 機器はモーションアナリシス社のソフト EvarT 4.2，マイクロソフト Kinect for Windows センサー L6M-00020，Kinect for WindowsSDKv1.8，MikuMikuMoving V1.2.7.2 である。またモーションキャプチャを用いた映像は，2008年11月に立命館大学衣笠キャンパスのアート・リサーチセンターで収録（研究代表者　遠藤保子）したものであり，キネクトを用いた映像は，2015年９月に筆者らがエチオピアの Kaffa Coffee Land Hotel で収録したものである。

9）　舞踊動作の収録の詳細は，以下のとおりである（デジタルカメラおよびキネクトで撮影）。

2014年９月12日 Tomas Haill 氏（Ethiopia National Theater の舞踊手）の民族舞踊をアディスアベバの Baro Hotel で収録，2015年９月23日 Ashebir Hayile 氏（カファの民族舞踊教師）および Mahilet Mengesha 氏（Ashebir 舞踊教室の生徒）と Kaleab Asweor 氏（Ashebir 舞踊教室の生徒）の民族舞踊をボンガの Kaffa Coffee Land Hotel で収録，2016年９月９日 Asegedech Difek 氏（元 Ethiopia Police Music and Theater の舞踊手）の民族舞踊をアディスアベバの Wudasie Castle Hotel にて収録した。

10）　本デジタル教材は公益財団法人学習ソフトウェア情報研究センター主催の「平成28年度第32回学習デジタル教材コンクール」で「パイオニア VC 賞（企業賞）」を受賞した。なお教材作成に際してプログラミングとインターフェイス・デザインは相原進氏に研究協力を依頼した。

11）　著者は野田章子（執筆時は，池田）。

12）　聞き取り調査の詳細は，以下のとおりである。

アムハラ民族の舞踊については，1997年８月20日 Maicheal Melake 氏（エチオプスアート舞踊団代表者）にアディスアベバにて，グラゲ民族の舞踊については2015年９月27日 Asagedech Difek（元 Ethiopia Police Music and Theater の舞踊手）にデセナにて，カファの舞踊については2015年９月23日 Ashebir Hayile（カファの民族舞踊教師）にボンガにて実施した。なお，質問項目はケアリノホモクのダンス・データ・ガイドを参考に作成し，半構造化インタビューを行った。

13）　実践授業は，授業者１名（筆者）と機材の設置および操作担当者１名，担任１名で行った。児童と授業者との直接的な関わりはなかった。

14）　ワークシートは，松本（2015）がふきだし法を体育学習に適用し，学習者の認知を汲み取る研究方法として用いているものを参考に作成した。松本は，ふきだし法は数学分野で亀岡が提唱した方法で数式を解く際に解答だけでなく思考の過程を書き残すことで，学習者自身が学習を見直すことのできる方法であると説明し，オープンエンドの質問調査紙法よりも簡易的でありながらも，記述内容を文脈も含めて捉えることができる方法だと記述している。ワークシートの１枚目には，語尾の言葉「楽しい」「面白い」「よかった」などを例示しているが，２枚目は全て空欄である。

15）　総合的な学習の時間の評価の観点は，各学校で設定される。その際に参考になるのが，平成22年に通知された「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」である。例えば，観点別学習状況の評価として４つの観点などを定め，各教科との関連を明確にすることがあげられている。本単元は，体育科と関連づけているため，体育科の４つの観点，「関心・意欲・態度」，「思考・判断・表現」，「技能」，「知識・理解」を定めている。

16）　実践授業終了日の家庭学習で作成した感想文「エチオピアのお友達へ」である。

17）　平成30年度告示の高等学校学習指導要領「保健

体育編　体育編」の③改善の具体的事項には,「生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて，運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実はもとより,（略）知識を基盤とした学習の充実が必要である」と記載されている。

引用・参考文献

Kealiinohomoku, Joann wheeler (1974) "Field Guides. In New Dimensions in Dance Research- The American Indian" *CORD Research Annual* 6 pp.245-260

Tibor Vadasy (1970) "Ethiopian Folk-Dance" *Journal of Ethiopian Studies* Vol.8 No.2 pp.119-146

Tibor Vadasy (1971) "Ethiopian Folk-Dance II: Tegré and Guragé" *Journal of Ethiopian Studies* Vol.9 No.2 pp.191-217

池田章子（2000）『エチオピアの民族舞踊―ダンスと人びとの生活―』立命館大学修士論文（社会学）

居城勝彦（2007）「LET'S 盆ダンス：異文化理解の学習過程を通して自分たちの文化に気づく」『藤棚東京学芸大学

教育学部付属世田谷小学校 - 紀要論文』no.39，pp.28-31

居城勝彦（2008）「Let's 盆ダンス―踊ることを通しての学ぶ日系文化のハイブリッド化―」『日系移民学習の理論と実践―グローバル教育と多文化教育をつなぐ―』明石書店，pp.72－87

石原美奈子編（2014）『せめぎあう宗教と国家―エチオピア　神々の相克と共生―』風響社 .

磯田三津子（2000）「MENC（全米音楽教育者会議）の音楽カリキュラムにみる多文化主義―『学校音楽プログラム』の分析を通して―」『国際理解教育』Vol.6 明石書店，pp.20-37

猪原真知子・中村恭子（1987）「エスニック・ダンスを教材としたダンス学習―コミュニケーション形成機能を活用した中学期における創作ダンス―」『学校体育』第40巻14号，pp.128-135

遠藤保子（1990）「ヨルバの舞踊―キリスト教と伝統宗教における舞踊の比較」『京都教育大学紀要』No.76, pp.133-154

遠藤保子（2001）『舞踊と社会　アフリカの舞踊を事例として』文理閣.

遠藤保子（2010）「スポーツ人類学と開発教育―モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊教材―」『スポーツ人類學研究』第12号，pp.1-25

遠藤保子（2013）「アフリカの舞踊とグローバル教育に関する基礎的研究」『日本女子体育連盟学術研究』第29巻，pp.1-15

遠藤保子（2014）「舞踊　DANCE」『アフリカ学事典』日本アフリカ学会編，昭和堂，pp.58-59

遠藤保子（2020）「デジタル教材の制作」遠藤保子監『映像で学ぶ舞踊学―多様な民族と文化・社会・教育から考える―』大修館書店，pp.190-193

織田雪江（2019）『コーヒーモノガタリ―アフリカを学ぼう地球市民になろう！―（改訂増補版）』アフリカ理解プロジェクト

亀谷真知子（2001）「大学体育における民族舞踊の授業」『女子体育』43（4），pp.20-25

仁科エミ・河合徳枝・不破本義孝・八木玲子・大橋力（1995）「ユーザー適応機能をもった実技習得用マルチメディア学習システムの開発について」『人文科学とコンピュータ』第95号，pp.37-42

鈴木孝夫（1969）『高地民族の国エチオピア』古今書院.

寒川恒夫（2017）「スポーツ人類学の成果と還元」『日本体育学会予稿集』第68号，p.50

高橋京子（2014）「大学体育において，インドの身体技法カラリパヤット Kalarippayattu の授業が受講生の心身に及ぼす影響」『大学体育学』11，pp.47-55

高橋京子（2018）「南マーシャルアーツ，カラリパヤットの実技授業に関する研究」『立命館産業社会論集』第54巻　第１号，pp.47-65

高橋京子（2020）「カラリパヤット―しなやかな身体づくりのためのマーシャルアーツ―」遠藤保子監『映像で学ぶ舞踊学―多様な民族と文化・社会・教育から考える－』大修館書店，pp.160-163

成田喜一郎（2010）「多様な教育方法と評価方法への支援」『学校指導と学校図書館』全国学校図書館協議会，pp.181-191

成田喜一郎（2013）「子どもと教師のためのオートエスノグラフィーの可能性：「創作叙事詩・解題」を書くことの意味」『ホリスティック教育研究』No16, pp.1-16

西岡尚也（2007）『子どもたちへの開発教育―世界のリアルをどう教えるか―』ナカニシヤ出版
野田章子（2020）「国際理解教育とアフリカの民族舞踊学習」『国際理解教育』Vol.26 明石書店, pp.23-32.
細谷洋子（2005）「カポエイラの教材化と実践授業における導入に関する一考察」『鶴川女子短期大学研究紀要』（25），pp.23-30
細谷洋子（2014）「カポエイラにおける授業構成の観点「ジョゴ」概念」『日本女子体育連盟学術研究』第30巻，pp.1-16
細谷洋子（2015）『アフロ・ブラジル文化　カポエイラの世界（スポーツ人類学ドクター論文集）』明和出版
細谷洋子（2018）「レクレーショナル・スポーツの教育目的および到達目標に関する研究―カポエイラのコミュニケーション性を活かした教材づくりに向けて―」『四国体育・スポーツ学研究』第4号，pp.1-14
細谷洋子（2020）「カポエイラ―幼児を対象としたカポエイラ―」遠藤保子監『映像で学ぶ舞踊学―多様な民族と文化・社会・教育から考える－』大修館書店，pp.168-171
松本奈緒（2015）「中学校段階の体ほぐしの運動における学習者の概念形成―ふきだし法による自由記述とインタビューの分析を通して―」『体育科教育学研究』31（2），pp.1-16
宮尾慈良（2003）「舞踊人類学の研究方法論」『スポーツ人類學研究』第5巻，pp.1-18

A Study of Teaching Materials on African Folk Dance: Through the Development of Digital Teaching Material "Ethiopian Society and Dance"

NODA Fumiko[i]

Abstract : In response to the recent challenge of how sports anthropology can contribute to the education of cultural understanding, this study details the development of teaching materials on African folk dance, examines the effectiveness of the introduction of African folk dance by this teaching material and clarifies its significance. The title of the teaching material developed is "Ethiopian Society and Dance." This teaching material is used in teaching international understanding to upper elementary school students, and is designed to be used in three chapters: A. Let's look into it!, B. Let's Sing!, and C. Let's Dance! The contents of the development of the teaching material are detailed in this study. Furthermore, this teaching material was digitized to facilitate active learning among children. The effectiveness of this teaching material was piloted in a practical class at K Elementary School in S City. In the class, students learned by themselves about backgrounds of Ethiopian Dance using this teaching material. The results showed firstly that the developed digital teaching material for African folk dance, based on anthropological research, was effective in helping foster understanding of different cultures among elementary school students, and secondly, the digital teaching material of African folk dance developed based on anthropological research may create simulations through which children can experience this African society. Thus, this study finds positive evidence for these types of teaching material. In this study, I suggest possibilities of understanding different cultures for learning dance in school education, in which sports are considered to be components of culture.

Keywords : anthropology, Africa, Ethiopia, folk dance, elementary/primary school students, development of digital teaching material, understanding different cultures

i Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University